

目 次

1. 各専攻・講座の教育・活動報告

看護学専攻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

医療技術学専攻医用量子科学講座・放射線技術科学専攻・・・・・・・・ 6

医療技術学専攻病態解析学講座・検査技術科学専攻・・・・・・・・ 1 3

リハビリテーション療法学専攻・理学療法学講座・・・・・・・・ 2 1

リハビリテーション療法学専攻・作業療法学講座・・・・・・・・ 2 6

2. 公開講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3 1

看護学専攻（平成25年度）

我が国の看護は、慢性的な看護師不足に加え、看護の質を問われる時代になってきている。そのような中、優秀な看護師/助産師/保健師の育成、看護の質の向上とその評価システムの構築、新たな看護の知の創生など、看護系大学に期待される役割は多彩である。特に本学は博士課程を有する看護系大学院として、ますます増加しつつある近隣の看護系大学の教員育成の役割も担っている。

1. 運営

本専攻では、専攻教授会において互選により選出した専攻主任を中心に、前主任が副主任として補佐的な役割を担い、前年度からの活動が継続できるような体制をとっている。専攻独自の委員会として、従来からの教育委員会、実習委員会、予算委員会、感染対策委員会、倫理委員会、就職・国家試験委員会、大学院委員会、整備計画委員会、国際交流委員会に、入試委員会を新たに設置して入学試験における態勢の強化を図った。

毎月各一回の看護教授会と専攻会議（教員全員参加）を開催して、専攻の方針を決定・確認・修正し、その方針に基づいて各自の役割を遂行した。主任・副主任・各領域長・実習委員長は附属病院看護部管理部門との合同会議（ユニフィケーション委員会）を1～2ヶ月に一回開催し、情報交換を密に行った。

各委員会活動において今年度新たに行ったことは、国家試験模擬試験の結果を各指導教員に配布したこと、シンガポール大学との学部生交流を開始したこと、専攻用倉庫を整理・整頓したこと、大学院生室のドアにテンキー式の鍵を設置したこと、資格認定による大学院受験者と編入試験受験者の入学志願書に課程を明記するようにしたことなどである。

実習委員会と国際交流委員会においては年報を作成し、毎年の活動を記録していくことにしている。交際交流の実績については、その活動状況をホームページに掲載して公開している。

他大学との連携については、日本看護系大学協議会、国立大学保健医療学系代表者協議会、全国保健師教育機関協議会、日本看護系大学協議会、愛知県看護系大学連絡協議会に加盟しており、それぞれの総会や各種報告会に参加し、情報交換や組織的活動を行った。特に国立大学保健医療学系代表者協議会看護分科会は、今年度まで幹事校となっており、中心的な役割を果たした。また、愛知県看護系大学連絡協議会は昨年引き続き今年度も会長を務め、年2回の情報交換会を本学で開催した。

2. 教育活動

1) 学部教育

学部教育においては、大学院講座化のあとも従来の4講座制を維持し、きめ細かな指導を行って、知性と感性を備えた看護職の育成を目指している。4月には例年どおり新

入生歓迎合宿を教員のサポートのもとで在校生が主体となって企画・実施し、9月には本格的な臨地実習を控えた3年生が実習へ向けての士気高揚のためにスポーツ大会を開催した。

今年度は特に、附属病院看護部との連携をさらに強化し、年度当初に附属病院看護師に依頼する講義や演習をリストアップして専攻主任名で委嘱状を発行することにし、正式な手続きを確立した。今年度の依頼は15科目に渡り、合計35コマの講義、技術演習補助、実習オリエンテーションなどを担当してもらうことができた。学生にとっては、より現在の臨床実践に基づいた学習をする機会となり、教員と臨床看護師とが共通理解を深めて、一貫した教育をすることができた。

指定規則が改訂された新助産師・保健師カリキュラムによる学生が次年度3年生となるため、助産師・保健師コース受講者の選抜試験要領を作成し、また、全員に新設する地域基礎看護学実習の準備を整えた。

学部生の国際交流は昨年までの延世大学ウォンジュ校、上海交通大学に加え、シンガポール大学との交流を開始した。本学学生は7月に5名シンガポール大学、11月に2名延世大学ウォンジュ校、3月に2名上海交通大学を訪れ、それぞれ1週間の海外研修を行った。先方からは、9月に4名のシンガポール大学生が来日し、11月には延世大学ウォンジュ校と上海交通大学から各2名が来日し、それぞれ1週間の研修を行った。派遣にあたっては国際交流委員会を中心に、志望動機書類審査と面接をそれぞれ英語で行って選抜した。選抜された学生は各国において、さまざまな医療保健施設を見学および実習を行って国際的視野を広げた。受け入れにおいては、シンガポール大学は医学部附属病院や企業等の見学、延世大学ウォンジュ校と上海交通大学は医学部附属病院において本学学生のシャドウイングをしながら見学実習を行った。実習に際しては、感染症の抗体価の確認を行った。いずれの大学の受け入れにおいても、本専攻有志学生によるボランティアグループが空港への送迎、歓迎会・送別会、市内観光等を企画・運営し、適宜教員がサポートした。

2) 大学院教育

今年度大学院博士課程前期課程修了者は15名、後期課程修了者は3名であった。

大学院において特筆すべき出来事は、リーディング大学院プロジェクト“ウェルビーイング in アジア実現のための女性リーダー育成プログラム”が採択されたことである。本プロジェクトは、国際開発研究科、教育発達科学研究科、生命農学研究科、医学系研究科の合同プロジェクトであるが、看護学専攻は女性教員・女子学生が多く、中心的な役割を担っている。採択決定後すぐに、フィリピン大学看護学部長を招聘し、講演会を開催した。今後も各国の看護学部との交流を深め、プログラムの実行に貢献していく予定である。なお、正式な運用は次年度後期からであるが、今年度はモニター学生として看護学専攻から2名がリサーチアシスタントとして採用され、特設の英語クラスには多数の学生が受講している。

他専攻と合同で行っている延世大学との学術交流は、今年はウォンジュ校で学術交流会が開催され、本専攻の大学院生4名（博士後期課程1名、博士前期課程3名）が発

表した。発表演題は以下のとおりである。

- Reliability and Validity of Measurement Method of the Lower Limb Muscular Strength Using a Bathroom Scale
- Initial Change of Position after Cardiovascular Surgery
- Factors Associated with Weight Gain after Smoking Cessation Therapy in Japan
- An Exercise Programme May Improve Cardiovascular Risk Factors without Deterioration of Renal Function in Patient with Chronic Kidney Disease

発表した4名は、その後1週間ウォンジュに滞在し、大学院の講義に参加したり、病院や保健センターの見学などを行うとともに、先方の大学院生との交流を深めた。

3. 研究活動

今年度、本専攻教員の執筆した論文は9本、総説・解説5本、著書4本であり、学会発表は91件であった。学会のうち16件は国際学会である。以下が今年度、教員が取り組んでいる研究課題一覧である。(教授・准教授のみ、4月当初在任者のみ)

- 太田 勝正 : 看護実践における情報倫理上の問題への取り組み、看護情報共有のための用語標準化の実証的研究、看護倫理に関する研究、緊急被ばく医療における看護職の役割に関する研究
- 山内 豊明 : 看護実践におけるアセスメント特にフィジカルアセスメントについての理論構築と実証的研究、看護ケアについての評価システムならびにその指標の開発、医療専門職間の関係性ならびに相補性についての研究
- 藤本 悦子 : 看護技術の検証と開発、睡眠に関する研究、リンパ浮腫ケアに関する研究、組織再生を促すドレッシング材の開発
- 大島 千佳 : 看護技術の検証と開発、睡眠に関する研究、血流およびリンパに関する研究
- 安藤 詳子 : がん性疼痛緩和に関する研究、終末期看護領域における研究、がん患者の症状マネジメントに関する研究
- 大川 明子 : 外来治療を受けているがん患者・家族に関する研究、補完・代替療法に関する研究
- 池松 裕子 : 循環危機患者の自覚症状、クリティカルな患者のQOL、発達障害のある看護学生の学習支援プログラム開発
- 横内 光子 : 救急看護に関する研究、周手術期看護に関する研究、急性期医療システムに関する研究
- 河野 由理 : 精神障がい者の退院支援や地域ケアに関する研究、児童・思春期の精神保健に関する研究、精神看護の技術および評価に関する研究、看護師のメンタルヘルスに関する研究
- 會田 信子 : 健康問題を有する高齢者の看護介入、老年看護におけるケア技術の開

- 発と検証、高齢者ケアの教育方法に関する研究、介護家族への支援、模擬患者役市民の負担尺度開発と教育方法
- 浅野 みどり : スペシャルニーズをもつ子どもと家族の強みを重視した看護、養育期の家族機能と強みを重視した予防的ケア、子どもと家族全体の健康とQOL
- 奈良 間美保 : 子どもと家族中心のケアに関する研究、在宅療養児と家族の支援に関する研究
- 玉腰 浩司 : 生活習慣病に関する研究、母子保健に関する研究、婦人科疾患・周産期疾患に関する研究
- 田辺 圭子 : 胎児期の低栄養と将来の生活習慣病との関連、低出生体重児の発育発達に関する追跡調査、新生児のケア
- 入山 茂美 : 産褥期の母乳育児に関する研究、産痛緩和ケアに関する研究、思春期の若者の性行動に関する研究
- 梶田 悦子 : 生活習慣病と生活要因に関する研究、根拠に基づいた地域保健対策の構築
- 榊原 久孝 : 生活習慣病の健康管理、職場の保健管理、物理的因子（振動）の生体影響
- 渡井 いずみ : 子どもの虐待予防地域ネットワークに関する研究、母子保健活動における保健師活動
- 平井 眞理 : 高血圧・虚血性心疾患患者の生活管理に関する研究、動脈硬化の予防と治療に関する研究、不整脈の薬物療法・非薬物療法に関する研究
- 前川 厚子 : がん患者のQOLと教育に関する研究、創傷とオストミーに関する研究、内部障害者のケアマネジメントに関する研究、ハイテク在宅看護に関する研究

4. 社会活動

今年度は、15年前に本専攻が中心になって設立した日本看護医療学会の学術集会を、附属病院看護部長が学術集会長となって開催した。2年前から本専攻教員と看護部実行委員会と密な連絡を取り合い、プログラム企画、演題募集、査読、当日運営等、すべてにおいて協力した。結果、前年度までを大きく上回る400人超の参加者があり、盛会であった。具体的な内容は以下のとおりである。

学術集会会長講演

基調講演「これからのチーム医療における看護職の役割」

シンポジウム「看護職間の連携への期待」

一般演題（口演） 41題

一般演題（示説） 41題

10月のホームカミングデーには、「小児緩和ケアを考える ～その意義と実践～」を開

催し、計 120 名（一般 91 名、T H P 学生 16 名、講師の先生 5 名、教員・スタッフ 8 名）の参加があった。

名古屋大学医学部附属病院に入院するこどもの家族が宿泊する施設を誘致する学生ボランティアサークル「おうちプロジェクト」は、その活動の成果が実を結び、11 月に「マクドナルドハウス」がオープンした。本専攻の学生はその中心メンバーとして活躍した。

（主任：池松裕子）

医療技術学専攻医用量子科学講座・放射線技術科学専攻（平成25年度）

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育と研究の目標は、以下の通りである。

- ・ 医療現場で使われている放射線・電磁波・超音波を利用した種々の医療機器の原理や特性をよく理解する。
- ・ 医療機器（CT、MRI、X線、核医学装置、USなど）の能力を最大限引き出すとともに、診断画像からの確かな情報を取り出せるようにする。
- ・ 治療のため人体に的確に放射線を照射できるようにする。
- ・ 医療放射線が人体に及ぼすかも知れない影響についての幅広い知識と応用力を身につける。
- ・ 専門知識ばかりでなく豊かな人間性を合わせ持つ人材を育成する。
- ・ 放射線技術科学を学ぶ人々を指導していく人材を育成する。
- ・ 医療技術者、研究者、教育者として、日進月歩する医療分野の進歩を理解し、常に新しい技術等を発信する。
- ・ 自ら医療の進歩を創生することが出来る科学者を育成する。

1. 運営

医療技術学専攻医用量子科学講座（放射線技術科学専攻）における教育に関するさまざまな問題、教育研究費の予算配分等の運営は、毎月1回の専攻会議、並びに専攻教授会の合議に基づいて行われている。

2. 教育活動

学部教育：

平成25年度の新入学生は、新1年生が43名（私費留学生2名を含む）、3年次編入者は4名であった。2年生は45名、3年生は46名（編入生4名を含む）、4年生は47名（編入生3名を含む）で、4年生は12名の教員のもと、それぞれの研究室で卒業研究を行った。また、3年生以下の学生も、12名の教員が指導教員となり、勉学、生活の両面で指導を行っている。診療放射線技師国家試験は卒業生40名が受験し、そのうち38名が合格した。編入生を含む卒業生名の進路は、医療機関に25名、その他1名、大学院進学が17名であった。

学部教育は、専任教員による授業の他に、非常勤講師を招いた特別講義、臨床実習、臨床現場の見学（名古屋大学医学部附属病院、愛知県がんセンターをはじめ、学生の出身地や学生の希望就職病院など）、放射線管理に関連して原子力発電所の見学（中部電力浜岡原子力発電所）など、将来、医療あるいは生産現場で役に立つと思われる教育活動が行われている。

大学院教育：

平成14年に大学院医学系研究科医療技術学専攻が創設され、平成25年度は、博士課程前期課程1年15名、2年17名、博士課程後期課程1年7名、2年3名、3年5名の計47名であった。前期課程の最終年度にあたる学生17名が修士論文を提出し、修士の学位を取得した。以下、学生名と修士論文題目を記す。

- 渡辺 恵美 Dual energyを用いた造影デジタルマンモグラフィ撮影技術のFeasibilityに関する研究
- 石井 崇倫 Dual Energy CT検査における人体被ばく線量評価に関する研究
- 磯村 勇次 CT画像における雑音分散に関する検討
- 市川 和茂 三次元シネ位相コントラスト磁気共鳴法を用いた脳血流動態と壁せん断応力解析の精度検証
- 岩井 大樹 タルボ・ロー干渉計型X線撮影における微分位相画像の画像処理に関する研究
- 高瀬 郁子 逐次近似法を用いた脳血管CT画像の画質特性に関する研究
- 竹内 瑛彦 Monte Carlo simulationを用いたPassive炭素線治療時の中性子被ばくの低減
- 田端 大輝 タグ標識磁気共鳴画像のオプティカルフローによる心筋運動解析
- 登澤 一輝 頸動脈における三次元シネ位相コントラスト磁気共鳴法を用いた血流動態解析の精度検証
- 丹羽 まい子 高エネルギー photon beam における wedge filter からの散乱線の表面線量への影響とその減弱の検討
- 沼元 瞳 モンテカルロシミュレーションを用いたマンモグラフィにおける被ばく線量評価に関する研究
- 法野 祐規 歯科用コーンビームCTにおける歯根膜腔観察を目的とした最適再構成フィルタの検討
- 丸山 星 被曝低減を目的とするCdTe製フォトンカウンティング検出器を用いたマンモグラフィ装置の開発に関する研究
- 水口 貴詞 低磁場術中MR画像における画質向上に関する研究
- 森 麻里香 三次元シネ位相コントラスト磁気共鳴法による大動脈血流動態評価の基礎検討
- 森川 高光 ステレオ視における奥行き弁別能の評価と画質特性への影響に関する研究
- 吉永 昭夫 磁気共鳴流体解析に形態画像として用いる磁気共鳴血管撮影データの位置ずれ改善とその効果

後期課程の3名が博士論文を提出し、博士の学位を取得した。以下、学生名と博士論文題目を記す。

- 望月 真吾 PET用サイクロトロンにおける放射化物の評価と安全管理に関する研究
(H25. 3. 31満期退学、H25. 7. 31学位授与)
- 井堀 亜希子 ソフトコピー診断における縮小画像の視覚評価に関する研究 (H25. 9. 27修了)
- 山崎 明日美 X線画像表示系におけるオーバーオールノイズ特性に関する研究 (H26. 3. 25修了)

3. 研究活動

当専攻の教員は幅広い専門分野を研究領域としているため、個々の教員が独自の研究活動を行っている。一部にグループによる研究活動、専攻以外との共同の研究活動も行っている。以下には各教員の研究領域を示し、外部と協力して実施している研究活動の一部を示す。

- 池田 充 教授 : 関数解析学を応用した医用画像における画像処理・雑音解析に関する研究。ROC 解析の手法に関する研究。
- 石樽 信人 教授 : 内部被ばく線量評価に関する研究 : (a) ラドン壊変生成物の線量評価、(b) 放射性核種の体内挙動の計算シミュレーション、(c) 体外計測装置の校正法。
- 礪田 治夫 教授 : 磁気共鳴 (MR) を用いた脳機能解析・血流解析 (特に脳動脈瘤)・心筋運動解析に関する研究。サーモサイフォン効果を具備した凍結治療プローブ開発。MR撮像技術・MR画像診断ならびに神経系・頭頸部画像診断に関する研究。平成25年度は、血流解析研究で4名、心筋運動解析研究で1名の修士を輩出した。
- 今井 國治 教授 : 数理統計学及び情報理論を用いたCAD のための画質評価法の構築。高電圧下における誘電・絶縁材料の放電劣化・破壊現象に関する研究。
- 緒方 良至 助教 : サムピーク法による放射能の絶対測定に関する研究。福島原発事故由来の環境汚染分析。空気中放射性ヨウ素濃度の高感度モニタリング装置の開発。可搬型液体シンチレーションカウンタの開発。水素同位体分離に関する研究。環境放射能の測定—特に環境レベルのトリチウムの測定に関する研究。放射線取扱施設の安全管理に関する研究。PET サイクロトロン周辺放射化に関する研究。PET サイクロトロン室内外の中性子束の測定に関する研究。¹⁸O水の純化処理時の空気中トリチウム濃度に関する研究。
- 小口 宏准 教授 : 電子線計測法 (水吸収線量計測、相互校正法)、Ge1 ドシメトリー、金属フィルターによる強度変調放射線治療法、放射線治療安全マネジメント。画像誘導放射線治療 (IGRT)。
- 川浦 稚代 助教 : 人体ファントム計測システムを用いた医療被ばくの測定・評価。日本人乳幼児人体ファントムの開発。X線CT検査における画質と線量の関係解明。
- 加藤 克彦 教授 : ポジトロン核医学に関する研究。核医学画像診断。甲状腺機能亢進症の¹³¹I内用療法。¹⁸F-FDG、¹⁸F-DOPA、¹¹C-choline、¹¹C-methionine、¹⁸F-FLT、¹⁸F-Na等を利用した腫瘍PET/CTに関する研究。¹²³I-IMP を使用したSPECT検査における新しい低侵襲性脳血流定量測定法の確立に関する研究。各種核医学検査における定量測定に関する研究。
- 小寺 吉衛 教授 : 医用画像の評価法の開発。検出器、表示系を含む医用画像の解析・評価。画質の向上と被曝線量の低減を目的としたデジタル画像処理。3次元画像表示システムの開発。
- 小森 雅孝准教授 : 炭素線治療における中性子被ばくに関する研究。粒子線治療における照射野形成法に関する研究。高エネルギーX線治療における線量分布評価
- 小山 修司准教授 : 診断領域 X 線の計測法の研究。X 線 CT の患者・術者の被ばく線量計測。

診断領域 X 線のエネルギー計測。マンモグラフィにおける線量計測。MR 撮像技術に関する研究。

- 島本 佳寿広教授 : 乳腺・甲状腺の超音波診断に関する研究。診断能に悪影響を与えないモニタの基準、読影環境、端末の操作性等を確立する研究。読影医の診断論理の妥当性を検証する研究。
- 津坂 昌利准教授 : 術中MRI を用いた脳外科手術ナビゲーションシステムの精度に関する研究。医療用液晶モニタの画質評価。携帯情報端末の画質評価と医療への応用。IT 活用による医療技術者教育システムの開発。高速画像ネットワークの技術開発と応用。暗号化通信、画像圧縮技術の遠隔医療への応用。
- 福山 篤司 助教 : MR装置を用いた血管内血流速度の計測精度に関する研究。Readout Segmented-Echo Planar Imagingを用いたQSI解析に関する研究。
- 藤井 啓輔 助教 : X線CT検査における成人および小児患者の被ばく線量評価と放射線防護に関する研究。低線量肺がんCT検診における撮影条件の最適化に関する研究。
- 本間 光彦 助教 : 放射線治療領域における放射線計測法に関する研究。CRの応用利用に関する研究。人体解剖実習体のX線撮影・CT撮影に関する研究。放射線カウンセリング。
- 山本 誠一 教授 : 小動物用PET/MRI一体型装置, PET装置, 小型ガンマカメラなどの分子イメージング機器の開発と応用。放射性セシウム検出器, イメージング装置などの環境放射能測定装置に関する研究。

4. 対外的な、または社会に関わりある活動

- 1) 国際放射線防護委員会 (ICRP) の線量計算に関するタスクグループ「DOCAL」委員として、シュリールゼー (ドイツ) での2013年会議に出席する等、ICRP第2専門委員会の活動に専門家の立場から参画した (石樽)。
- 2) 独立行政法人放射線医学総合研究所・国連科学委員会国内対応委員会委員として、国による国連科学委員会への対応に関する審議に専門家の立場から参画した (石樽)。
- 3) 独立行政法人日本原子力研究開発機構・国際放射線防護委員会技術的基準等の整備運営委員会委員として、ICRP2007年勧告の取り入れのための技術的基準の整備に関する審議に線量評価の専門家の立場から参画した (石樽)。
- 4) 日本放射線安全管理学会の理事を務めた (石樽)。
- 5) 公益社団法人日本放射線技術学会と一般社団法人日本医学物理学会の共同英語論文誌 "Radiological Physics and Technology" (RPT) 誌の副編集委員長の一人として編集に従事した (小寺)。
- 6) Computer Assisted Radiology and Surgery (CARS) の program committee の委員としてプログラム選考に従事した (小寺)。
- 7) 第66回診療放射線技師国家試験の試験委員を務めた (島本)。
- 8) 一般社団法人日本超音波医学会評議員を務めた (島本)。
- 9) 一般社団法人日本乳腺甲状腺超音波医学会幹事を務めた (島本)。

- 1 0) アイルランド, ダブリンで開かれた世界分子イメージング学会において, category co-chairとして, 演題の採択, 口頭発表の選択, 座長などを行った(山本)。
- 1 1) 放射線計測をテーマとした第9回堀場雅夫賞において, 審査委員を行った(山本)。
- 1 2) 「日本生体医工学会東海支部学術集会」の大会長として、「日本生体医工学会東海支部学術集会」を企画・開催した(池田)。
- 1 3) 「日本生体医工学会東海支部学術集会」の企画・運営に参加した(今井・川浦)。
- 1 4) 一般社団法人日本核学会健保委員会委員として診療報酬改定に関する要望項目の検討等に参画した(加藤)。
- 1 5) 外科系学会社会保険連合会委員手術委員会委員として手術報酬に対する外保連試案、新術式・改定等の検討等に参画した(加藤)。
- 1 7) 一般社団法人日本核学会評議員を務めた(加藤)。
- 1 8) 第15回国立大学診療放射線技師教育施設協議会において、国立大学診療放射線技師教育施設における教育及び研究に関する諸問題についての協議に参画した(加藤・小山)。
- 1 9) 第59回全国診療放射線技師教育施設協議会において、診療放射線技師教育に関する諸問題についての協議に参画した(加藤・小山)。
- 2 0) 一般社団法人日本核学会編集委員を務めAnnals Nuclear Medicineの編集に参画した(加藤)。
- 2 1) 公益社団法人日本医学放射線学会の代議員を務めた(磯田)。
- 2 2) 公益社団法人日本医学放射線学会中部地方会の世話人を務めた(磯田)。
- 2 3) 日本神経放射線学会の評議員を務めた(磯田)。
- 2 4) 一般社団法人日本磁気共鳴医学会の評議員を務めた(磯田)。
- 2 5) 日本低温医学会の理事・評議員を務めた(磯田)。
- 2 6) 名古屋陽子線治療センターの治療技術・物理検討委員会委員長として、陽子線治療装置の治療技術の検討、精度管理(QA/QC)プロトコールの作成に参画した(小森)。
- 2 7) 一般社団法人日本医学物理学会の教育委員として、医学物理教育のためのセミナー、講習会などの企画・運営に参画した(小森)。
- 2 8) 一般社団法人医学物理学会の理事・計測委員・防護委員として会の企画・運営に関わり、標準計測法12を出版した(小口)。
- 2 9) 公益社団法人日本放射線技術学会の評議員・放射線治療分科会委員として会の企画・運営に関わり、分科会2回、放射線治療セミナーを2回開催した(小口)。
- 3 0) 公益社団法人日本放射線技術学会関東部会の関東RT研究会代表幹事として会の企画・運営に関わり、セミナーを5回、シンポジウムを一回開催した(小口)。
- 3 1) 一般社団法人医学物理士認定機構の評議員・教育委員・広報委員として会の企画・運営に関わり、医学物理士認定、医学物理教育コース認定を行い、教育講演会を2回開催し、HPの刷新を行った(小口)。
- 3 2) 放射線治療品質管理士認定機構認定機構の理事として会の企画・運営に関わった(小口)。
- 3 3) 公益社団法人日本放射線腫瘍学会の物理技術WG代表として会の企画・運営に関わった(小口)。
- 3 4) 本放射線治療専門放射線技師認定機構の理事・広報委員として会の企画・運営に関わり、認定事業、教育セミナー開催、機関誌発行を行った(小口)。
- 3 5) 長野赤十字病院放射線治療管理委員会の外部委員として2回の会議に参画した(小口)。

- 36) 国立がん研究センターがん対策情報センターのアドバイザーパネル委員として、放射線治療の安全対策に参画した(小口)。
- 37) 東海放射線腫瘍研究会技術部会の幹事として、研究会を開催した(小口)。
- 38) 平成25年度放射線治療専門放射線射線技師認定機構の東海地区統一セミナー(名古屋大学医学部附属病院)で相互校正法の講演および実技指導を行った(小口)。
- 39) 平成25年度放射線治療専門放射線射線技師認定機構のセミナー講師(電子線計測)を行うと共に認定試験問題の作成、認定試験の実施を行った(小口)。
- 40) 日本放射線技術学会の学術委員として研究、教育、学会の企画、提案を行った(小口)。
- 41) 名古屋大学放射線治療物理学セミナーを3回開催した(小口)。
- 42) 日本放射線技術学会東京部会セミナー(首都大学東京)で電子線相互校正の講義を行った(小口)。
- 43) 日本放射線技術学会関東部会セミナー(北里大学)で電子線相互校正の講義を行った(小口)。
- 44) 日本放射線技術学会放射線治療セミナー(名古屋大学)で電子線相互校正の講義を行った(小口)。
- 45) 平成25年度放射線治療専門放射線射線技師認定機構の認定指導者実機講習会(東芝メディカル那須工場)の企画立案を行い、相互校正法の講演および実技指導を行った(小口)。
- 46) 三重県放射線治療研究会(三重中央医療センター)で電子線相互校正の講演を行った(小口)。
- 47) 山形放射線治療研究会(山形県立中央病院)において電子線相互校正の講演と実技指導を行った(小口)。
- 48) 一般社団法人 日本生体医工学会の実施する第2種ME技術実力検定試験・試験委員として試験問題の作成、および名古屋会場実施責任者として本学において試験を実施した(津坂)。
- 49) 一般社団法人 日本医療情報学会の実施する医療情報技師検定試験において試験委員、および名古屋会場副責任者として試験の試験を実施した(津坂)。
- 50) 一般社団法人 日本医療機器学会の実施するMDIC(医療機器情報コミュニケーター)認定制度において、MDIC認定セミナー講師、MDIC検定試験の試験委員として問題の作成、および名古屋会場副実施責任者として試験の実施を行った(津坂)。
- 51) 公益社団法人日本放射線技術学会代議員として、会の運営に参画した(小山)。
- 52) 国際計量研究連絡委員会放射線標準分科会専門委員として、本邦における放射線計量標準の運営に参画した(小山)。
- 53) 特別非営利活動法人日本X線CT専門技師認定機構X線CT認定技師試験委員会委員として、X線CT認定技師試験問題作成を行った(小山)。
- 54) 一般社団法人日本磁気共鳴医学会安全性評価委員会に委員として参画し、平成25年10月に「MR安全性の考え方」(名古屋開催)の運営を行った(小山)。
- 55) 公益社団法人日本アイソトープ協会放射線安全取扱部会中部支部に委員として参画し、平成25年3月放射線取扱主任者定期講習会講師、平成25年5月教育訓練講習会講師としてそれぞれ講義を行った(小山)。
- 56) 日本保健物理学会第46回研究発表会の実行委員として、会の企画・運営に携わった(緒方)。

- 5 7) X線作業主任者受験講習会の講師を勤めた。内容：X線の測定（電子科学研究所主催）（緒方）
- 5 8) 白川中学校（岐阜県加茂郡白川町）にて放射線と放射能の講義を行いと実験を指導した（緒方）。
- 5 9) 静岡県立浜松南高校 高校生のための放射線実習セミナー講師・実習指導（日本原子力文化振興財団）（緒方）
- 6 0) 平成 25 年 6 月 公益社団法人愛知県診療放射線技師会主催、平成 25 年度フレッシューズセミナーにおいて、「胸部単純撮影講座」の教育講演を行った（本間）。
- 6 1) 平成25年8月 名古屋大学大学院医学系研究科において行われた、第33回人体解剖トレーニングセミナーにおいて、人体解剖実習の指導を行った（本間）。
- 6 2) 平成25年11月 公益社団法人愛知県診療放射線技師会主催、第6回県民公開講座において実行委員として企画・運営に関わり、放射線に関する説明および相談を行った（本間）。
- 6 3) 平成 26 年 3 月 公益社団法人愛知県診療放射線技師会主催、平成 25 年度第 4 回研修会において、「社会人のための基礎医学講座－頭部領域の解剖・生理」の教育講演を行った（本間）。
- 6 4) 公益社団法人日本診療放射線技師会の代議員として会の企画・運営に関わった（本間）。
- 6 5) 公益社団法人愛知県診療放射線技師会理事として、会の企画・運営に関わった（本間）。

（主任：加藤 克彦）

医療技術学専攻病態解析学講座・検査技術科学専攻（平成25年度）

病態解析学講座では、正常ならびに病的状態における生体の諸現象をさまざまな専門分野で検討し、得られた情報を解析、統合し、医学ならびに保健学を推進するために有用な生体情報についての学術理論、新たな技術およびその応用を教授研究している。平成24年4月に大学院講座化し、名古屋大学大学院医学系研究科病態解析学講座は新体制のもとで研究、教育の盤石な礎を着実に築いてきた。本講座は、環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学からなる。この6つの学問領域が、先端的な研究、学際的な病態解析、技術開発を進めるとともに、指導的医療人として、高度化・多様化する医療の動向を見据え、病態解析学研究を遂行できる能力の育成し、社会の急激な変化に対応可能な俯瞰力や独創力に加え、医療チームを有機的に連携させ、必要な場合には産学官に亘りグローバルに活躍できる能力をもつ人材の育成を図ることを教育の目的としている。特記すべきこととして、第50回国立大学臨床検査技師教育協議会（議長：川部 勤主任）を会長校として開催した。全国20校から代表者総勢43名が一堂に会し、臨床検査技師教育を行う国立大学が相互間の緊密な連絡と協力により、臨床検査技師育成に関する教育及び研究等の諸問題について協議し、また活発な意見交換を行った。

1. 運営

本講座は環境病因解析学、病態化学解析学、病因病態解析学、生体生理解析学、形態情報解析学、分子病態解析学の6つの学問領域からなる大講座であり、領域間の壁をなくし、講座が一丸となって運営している。講座の運営は講座主任(川部)を中心に、全17名の教員が参加する講座会議の審議・決定に従って行われた。講座会議は第1と第3、ならびに第4水曜日の17時から開催され、必要に応じて臨時に開催された。

2. 教育活動

1) 4月に第16期の入学生43名(推薦入学生16名、前期日程入学生27名)、および第14期編入生1名を迎えた

2) 4月の新入生ガイダンスには講座主任、学生生活委員、教育委員、教員と1年生全員が参加し、専攻の教育と学生生活のガイダンス、教員の紹介、指導教員の紹介、学生の自己紹介などが行われた。

3) 感染対策

病態解析学講座として講座内感染対策委員会を中心に学生ガイダンス、臨地実習前などに検体を扱う上での感染予防の意義や検査、ワクチン接種等の指導を行っている。また、実習における感染予防にも努めている。

- 4) 第13期生の臨地実習を充実させることを目的に病態解析学講座(保健学科)教員、医学部附属病院検査部の教員および技師との合同会議(臨床検査専門委員会)を5月13日に開催した。
- 5) 5月8日には検査技術科学専攻の2年生が中心になって教員と共に新入生歓迎会を大幸厚生会館にて開催した。
- 6) オープンキャンパス
平成24年8月9日(金)に大幸キャンパスで実施し、申込者数220名に対して来場者数は、192名であった。検査技術科学専攻の説明、教育カリキュラム、教育の目標と内容、特色と卒業後の進路の説明、卒業生からの講演を企画した。その後、施設内を見学するキャンパスツアーでは、実際に研究室を訪ね、教員や院生による研究内容などの説明および顕微鏡を用いた観察などを体験した。同様の内容で午前・午後ともに2時間ずつ実施したが、アンケート結果より参加者の満足を確認でき、有意義なオープンキャンパスを実施できた。
- 7) 8月28日に第15回の3年次編入試験を行い、1名の合格者を決定した。
- 8) 8月29日に第13回大学院医学系研究科医療技術学専攻病態解析学分野(博士前期課程)の入学試験を実施し、13名の合格者を決定した。また、30日には第11回の大学院同(博士後期課程)の入学試験を実施し、4名の合格者を決定した。
- 9) 平成26年3月には本専攻の第13期生の卒業生として、43名を社会に輩出した。そのうち15名が大学院 博士前期課程へ進学し、就職希望の28名は、1名をのぞき、主に国公立大学病院、公私立病院等の検査部に就職した。また、大学院医学系研究科病態解析学分野(博士前期課程)の第11期生の修了生として、社会人大学院生2名を含む22名を社会に輩出した。そのうち1名が大学院同(博士後期課程)へ進学し、就職希望の19名は全員が就職し、就職率は100%であった。
- 10) 第13期生の第60回臨床検査技師国家試験(平成26年2月19日)の準備として全教員による教育指導と6回の模擬試験を実施した。13期生の第60回臨床検査技師国家試験合格率は43/44(既卒1名含む)で97.7%であった。

3. 研究活動

本専攻では4月5日に博士前期課程に13名の第12期生、博士後期課程に4名の第8期生を迎えた。平成26年2月9日に第8回の病態解析学分野博士前期課程研究発表会(修士論文発表会)を開催し、前期課程・第11期生名が発表した。学部関係では平成25年5月26日に第11期生による卒業研究発表会が開催された。以下に各講座における卒業研究発表内容を示す。

【生体生理解析学部門】

指導教員：永田 浩三 平山 正昭

- 1 麻酔方法の血圧・心拍数、心エコー所見、及び糖脂質代謝に及ぼす影響の検討
- 2 新規メタボリックシンドロームラットモデルにおけるエイコサペンタエン酸の脂肪組織、心筋傷害、および基本病態に及ぼす影響の検討
- 3 視覚誘発磁場における加齢の影響
- 4 若年者と高齢者における感覚連続刺激に対する応答
- 5 筋萎縮性側索硬化症モデルマウスにおける分子状水素の発症抑制効果
- 6 水素水投与は Duchenne 型筋ジストロフィーモデルマウスの運動機能を改善する

【病因病態解析学部門】

指導教員：川部 勤 川村 久美子 松島 充代子

- 7 B細胞の体細胞高頻度突然変異における CD40 分子の役割
- 8 ウイルス感染によるマクロファージの活性化に対するケルセチンの効果
- 9 ウイルス感染に伴う各種サイトカイン産生に対するケルセチンの抑制効果およびその機序
- 10 蛍光抗体染色法を用いた IMP-型 metallo-beta-lactamase 産生腸内細菌科菌種の迅速検出
- 11 健常人由来基質特異性拡張型 β -ラクタマーゼ産生大腸菌の細菌学的特徴
- 12 プラスミド伝達性キノロン耐性遺伝子 qnrA の保有が大腸菌の生存に与える影響について

【分子病態解析学部門】

指導教員：村手 隆 小嶋 哲人 高木 明

- 13 プロテイン S 欠乏症の遺伝子解析
- 14 プロテイン C 欠乏症の PROC 解析
- 15 先天性アンチトロンビン欠乏症の SERPINC1 遺伝子解析
- 16 血友病 A 症例における第 VIII 因子遺伝子解析
- 17 スフィンゴ脂質代謝経路における Ceramide synthase 1 (CerS1) の発現調節機序の解明
- 18 ヒト角化細胞株 HaCaT の Ceramide synthase 3 発現解析モデルとしての適性
- 19 スフィンゴ脂質代謝酵素 Ceramide synthase 6 (CerS6) の発現調節機序の解明

【形態情報解析学部門】

指導教員：長坂 徹郎 川井 久美 橋本 克訓

- 20 免疫組織化学および形態計測学的解析による子宮内膜増殖性病変の鑑別
- 21 液状化細胞診(LBC)の長期保存による細胞形態への影響

【環境病因解析学部門】

指導教員：近藤 高明 石川 哲也

- 22 高齢者の食欲不振と免疫・ホルモン環境の変化との関連について (続報)
- 23 食欲関連ホルモン、グレリン/レプチンによる炎症応答制御について
- 24 一般成人集団での血清脂肪酸構成と炎症指標、動脈硬化指標、eGFR との関連

25 一般成人集団での血清アルブミン redox 状態と生体指標との関連

【病態化学解析学部門】 指導教員：涌澤 伸哉 上山 純

- 26 パルミチン酸負荷肝癌由来細胞における酸化ストレス亢進機序の解析
- 27 肝癌由来細胞におけるウルソデオキシコール酸とインスリンの協力作用に関する基礎的検討
- 28 HPLC ポストカラム BCG 誘導体化法を用いた Alb 測定の検討
- 29 高速液体クロマトグラフ-タンデム質量分析計を用いた尿中有機リン系殺虫剤代謝物測定法の開発
- 30 日本の職域集団における尿中ピレスロイド系殺虫剤代謝物量の特徴

4. 対外的な、または社会に関わりある活動

A) 国際交流

延世大学(韓国)との国際交流事業は、11月7日～9日に行われ、病態解析学講座から4名の大学院生と小嶋先生ならびに石川先生が韓国に赴かれ、研究成果について口頭発表と質疑応答を行った。大学院生については交流会終了後にさらに11月15日まで韓国に滞在し、研究室訪問などを行った。この交流事業組織委員会には近藤高明教授と松島充代子助教が出席し、企画や運営の役割を担った。

川部 勤教授と松島充代子助教は8月にミラノコンベンションセンター(イタリア)で開催された第15回国際免疫学会議(ICI 2013)に出席し、指導大学院生3人のポスター演題を含む4演題を発表した。

小嶋哲人教授は7月にオランダ・アムステルダムで開かれた第24回国際血栓止血学会(ISTH 2013)に出席し、シンポジストとして招待講演を行うと共に、指導大学院生4名ならびに修了生1名の計5名(口演1題、ポスター4題)の発表を指導した。また、小嶋教授は、9月に行われた第24回韓国血栓止血学会(KSTH 2013)に招待され、特別講演を行った。

永田浩三教授は9月にニューオリンズ(米国)で開催された米国心臓協会高血圧部会(AHA-HBPR2013)の年次集会に出席し、指導大学院生1名のポスター演題を発表した。

村手 隆教授は10月にアメリカ Montauk にて開催された7th International Ceramide Conference に出席し、指導大学院生の口演、ポスター演題各一題を発表した。

川村久美子准教授は、10月に採択された博士課程教育リーディングプログラム「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダー育成プログラムの担当教員として、大幸地区での特別講演会を企画、25年12月と26年3月に開催した。また、26年2月

にはプログラム担当教員 8 名、4 研究科（国際開発、教育発達科学、生命農学、医学）から選出された試行プログラム学生 7 名とともにフィリピン研修に参加し、De La Salle 大学、Philippine 大学マニラ校を訪問、今後の共同研究体制について情報交換を行なった。

また、プログラム担当教員である川村久美子准教授に代わり、川部 勤教授は 3 月末にチュラロンコン大学、大学病院およびマヒドン大学サラヤキャンパス内の Institute for population and social research および ASEAN Institute for Health Development を訪問し今後の連携について、方向性とある程度具体的な検討をし、また Wat Phra Bat Nam Phu（エイズホスピスで有名）研修でも研修した。

川村久美子准教授は 6 月にパシフィコ横浜（日本）で開催された 28th International Congress of Chemotherapy and Infection (ICC 2013) に出席し、指導大学院生 2 人(前期課程 2 年・後藤謙介、佐藤夏巳)によるポスター演題を共同演者として発表した。

平山正昭准教授は、17th International Congress of Parkinson's Disease and Movement Disorders に後藤沙絵と参加し、研究発表を行った。The 13th International Parkinson's disease symposium in Takamatsu にシンポジストとして招待講演を行うと共に指導大学院生 1 名及び学部生 2 名の参加を行った。

林由美助教は 6 月に韓国で開催された第 13 回国際毒性学会（ICT）に出席し、研究発表を行った。

B) 大学間交流

平成 25 年度は名古屋大学が国立大学臨床検査技師教育協議会の会長校として、全国 20 校から教員、事務職員を含めて 43 名の出席のもと、5 月 24 日(金)に第 50 回国立大学臨床検査技師教育協議会(議長：川部 勤主任)を開催した。主な議題：1) 役員の選出について、2) 平成 25 年度予算案について、3) 担当科目関連学会（特に専門技師認定学会）への入会について審議した。承合事項としては、1) 日本臨床検査学教育協議会への機能強化に向けての本協議会の参画について、2) 検査技術学分野以外での教育負担について、3) 編入生の受け入れ、試験の合格基準について、4) 私費外国人留学生の受け入れ、試験の合格基準について、5) その他として各校の入試改革の現状についてなどを話し合った。

石川哲也教授は、平成 24 年度から厚生労働省科学研究費補助金 B 型肝炎創薬実用化等研究事業の 2 つの研究班「B 型肝炎ウイルスの持続感染を再現する効率的な培養細胞評価系の開発に関する研究」、「HBV cccDNA の制御と排除を目指す新規免疫治療薬の開発」に分担研究者として参加し、前者では名古屋市立大学大学院医学研究科病態医科学 田中靖人教授と、後者では岐阜大学大学院病態情報解析医学 伊藤弘康准教授と共同研究

を行っている。また、平成 25 年度からは、科学技術振興機構「再生医療実現拠点ネットワークプログラム」での技術開発個別課題「iPS 細胞分化・がん化の量子スイッチング in vivo Theranostics」(代表研究者 名古屋大学大学院工学研究科 馬場嘉信教授)に分担研究機関として、林由美助教とともに参加している。

永田浩三教授は、8月に開催された第8回日本臨床検査学教育学会学術大会に参加し、臨床検査技師の将来像に関する情報収集を行うとともに、この期間中に開催された科目別分科会 第1回例会に出席し、生体検査学(循環生理学、呼吸生理学、神経生理学、画像検査学)の会長に選出され、教育の質の向上、卒前・卒後教育の連携、研究の推進、および例会の開催時期等について議論を行った。

C) 地域との連携

石川哲也教授は、平成 23 年度より長寿医療研究開発費「高齢者の食欲不振、低栄養状態の原因の解明に関する研究」(代表研究者 国立長寿医療研究センター病院消化機能診療部 松浦俊博部長)に分担研究者として参加している。また、日本消化器病学会東海支部評議員、日本肝臓学会西部会評議員としての活動を継続し、平成 25 年 12 月には岐阜で開催された日本肝臓学会後期教育講演会プログラムにおいて、「薬物性肝障害の基礎と臨床」の講演を行った。

川部 勤教授は、松島充代子助教とともに平成 22 年度から開始した愛知県「知の拠点」重点プロジェクト P3 超早期診断技術開発プロジェクトの研究員として名古屋大学大学院情報科学研究科間瀬健二教授や地元企業とともに医学部側代表として共同研究に参加している。また、同大大学院工学研究科式田光宏准教授と微細気流計の開発を、さらに同大大学院工学研究科西洋典彦准教授と OCT による肺組織の観察システムの開発について共同研究を継続して行った。さらに、今年度は新たに中部大学の応用生物学部山本 敦教授、山本良平教授、日本ファイルコン井上嘉則主任研究者らと呼気による血中薬物動態モニタリングシステムの開発に向けた共同研究を開始した。川部 勤教授は、3月に第17回名古屋呼吸器領域卒後専門教育セミナーのプログラム委員として、セミナーを企画実行した。また、愛知県公害健康被害認定審査会会長として申請書類の審査に責任をもち、日本アレルギー協会東海支部編集委員として、さらに東海分子呼吸器研究会、東海喘息研究会、東海成人喘息研究会等の世話人として呼吸器・アレルギー疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化、啓発活動の推進に尽力した。平成 23 年より特定非営利活動法人 中日本呼吸器臨床研究機構の監事として機構の運営に関わっている。平成 24 年からは椋山女学園大学実用化研究拠点に参加研究者として協力している。

小嶋哲人教授は、愛知県特定疾患研究協議会において血液凝固異常症調査研究ならびに門脈血行異常症調査研究を行った。また、第 33 回東海薬物治療研究会(平成 25 年 5 月 25 日)、第 9 回東海 DIC up to Date(平成 25 年 6 月 7 日)、西濃抗凝固セミナー(平成 25 年 8 月 29 日)での講演を通して、地域への研究活動の情報提供、啓発活動を

行った。

近藤高明教授は、平成14年から愛知県犬山での健康プラン推進委員会」の委員として地域の健康増進活動に学術専門家として協力してきたが、平成25年度は「みんなで進める犬山健康プラン21（健康日本21 犬山計画）」第二次計画策定作業の総括責任者として責務を担った。8月下旬に北海道八雲町で3日間実施された「町民ドック」は多くの大学と町の共同で疫学調査を兼ねた事業であり、スタッフの一員として2名の大学院生と参加し、その成果を町民の予防活動に還元するよう努めた。8月と3月には、愛知県内の殺虫剤散布従事者を対象とした健康調査と結果判定作業に参加した。1月には愛知県職員で脂質異常症の疑いを指摘された健診受診者を対象に、教育講演を行った。また名古屋大学早期予防医療創成センター教授を兼任し、トヨタ自動車健康保険組合との共同事業として従業員健康管理手法の開発チームに参加した。

形態情報解析学部門（長坂徹郎教授、川井久美准教授、橋本克訓助教）は、東海がんプロフェッショナル養成基盤推進プランの後援を受けて、名古屋大学細胞診セミナーを開催した。本セミナーは、細胞検査士資格の取得を目指す臨床検査技師の卒後教育の一環としてのみならず、がんの早期発見、および診断に重要な役割を果たす細胞診の重要性を学生、一般市民に広く啓蒙する目的も担う。平成25年度は計4回（5月、9月、12月、3月）のセミナーを開催し、東海地区の臨床検査技師や学生など、のべ、234名が受講した。

永田浩三教授は10月に開催された第36回日本高血圧学会総会において「高得点演題3 基礎」の座長を務めた。日本高血圧学会評議員、日本心不全学会評議員、日本循環器学会東海支部評議員、日本内科学会東海支部評議員として学会活動の活性化に尽力した。また、3月より日本循環器学会本部社員に就任した。東海心筋代謝研究会の世話人および名古屋大学分子細胞循環器研究会の幹事として循環器疾患の基礎ならびに臨床研究の活性化に尽力した。名城大学附属高等学校学校評議員として学校運営および高大接続のために尽力するとともに、6月より同校のSSH運営指導委員会委員に就任し、同校が取り組むSSHの事業計画および成果報告に関する評価・指導・助言を行った。

村手 隆教授は愛知県特定疾患審査会委員として疾患認定に参画している。

川村久美子准教授は、名古屋大学予防早期医療創成センター准教授（兼任）として、日本ガイシ株式会社との共同研究（新規プラズマ滅菌装置の開発）に参加している。25年7月および26年1月 東山キャンパスにおいて開催された予防早期医療創成センターワークショップで、日本ガイシ株式会社との共同研究により得られた成果を発表するなど、産学官の連携および融合研究の発展に尽力した。

平山正昭准教授は、愛知県パーキンソン病友の会の顧問として、年3回の患者向け講演・1泊患者会旅行・年1回の総会、及び年6回の会報での“葉の話”を寄稿しボラン

ティアとして参加した。「知の拠点」重点プロジェクト P3 超早期診断技術開発プロジェクトの研究者として、名古屋大学神経遺伝情報講座の大野欽司先生らと共同で“パーキンソン病における皮膚ガスならびに汗の L-dopa・L-dopa 代謝産物・揮発性ガス測定”共同研究し、Analytical Methods に論文として報告した。名古屋大学予防早期医療創成センター准教授（兼任）として東山キャンパスにおいて開催された予防早期医療創成センターワークショップに参加した。パーキンソン病市民フォーラム（11/17）で市民公開講座の講演を行った。西濃地区医師会主催西濃医療講演会（1/9）でパーキンソン病の講演を、春日井市医師会主催てんかん治療（3/20）の講演を行った。宮古島医師会主催市民公開講座でパーキンソン病治療について講演した。日本自律神経学会（名古屋、10/23~10/25）のプログラム委員として学会の運営を行った。日本自律神経学会評議員（評議員）日本神経学会評議員（代議員）日本末梢神経学会評議員（評議員）を任命され学会運営に協力した。日本神経学会（東京）でシンポジストとして“PD の循環系予備能と運動処方の実際”について講演した。日本自律神経学会（名古屋）でシンポジストとして“失神と自律神経障害”について講演した。Movement disorder society of Japan 教育研修会（福岡）で“自律神経障害”について講演した。

高木明助教は、東海 KOAG 研究会代表幹事として血液検査部門に従事する臨床検査技師の卒後教育に尽力した。第 17 回東海 KOAG 研究会（平成 25 年 4 月 13 日）、第 73 回山梨血液研究会（平成 26 年 3 月 14 日）での講演を通して、地域への研究活動の情報提供、啓発活動を行った。中部地区 医療・バイオ系シーズ発表会（平成 25 年 12 月 12 日）で研究成果を発表し産学連携および融合研究の発展に尽力した。

橋本克訓助教は愛知県臨床検査技師会・病理細胞検査研究班の班員と活動し、病理検査部門に従事する臨床検査技師の卒後教育に尽力した。同研究班においては、主に病理組織検査の精度管理を担当した。また、同技師会主催の平成 25 年度スキルアップ教育研修会（12 月）では、講師を務めた。

（主任：川部 勤）

リハビリテーション療法学専攻理学療法学講座・理学療法学専攻（平成25年度）

理学療法学は、身体組織および機能の障害、あるいは能力低下を持ちながらも、質の高い人生を送るために不可欠なリハビリテーション医療に関する研究推進ならびに高度専門教育を行う。そのために、障害の原因となる病態や機能障害の発生機序を生理学的に解明する基礎研究とともに、障害の効果的回復や機能維持、更には疾病・障害の再発予防に関する臨床研究を積極的に推進し、質の高い理学療法の基盤を創造する。また、学内他専攻はもとより、他大学ならびに海外の学術・研究チームと積極的に交流し、国際的水準で研究推進ならびに後進の指導を行い得る人材の育成に努めるものである。

1. 運営

本専攻は、2012年度から大学院の重点化に伴い、リハビリテーション療法学専攻理学療法学講座として組織されている。運営は、全教員（総数9名）による講座会議（毎週水曜日12時から開催）における協議・決定にしたがい進められている。さらに、同じ専攻である作業療法学講座と合同の大学院会議（毎月第1,3水曜日）を行っている。

2. 教育活動

学生については、学部においては理学療法学専攻の名称が用いられる。大学院博士前期課程では理学療法学分野、大学院博士後期課程はリハビリテーション療法学専攻が理学療法学領域と作業療法学領域を併せて一講座としているため、便宜上、理学療法学関係と記述している。

○平成25年度の具体的活動内容

学部生としては、4月に保健学科理学療法学専攻第16期生として22名の学部学生を迎え入れた。選抜方法による内訳は、推薦入学8名、前期日程試験入学14名、また、2年次編入に合格した学生3名が加わった。性別では男子学生10名、女子学生12名であった。大学院には、前期課程に9名（一般選抜9名）、後期課程に4名（一般選抜1名）が入学した。こうして、理学療法学専攻としての学生数は、1年生22名、2年生24名、3年生24名、4年生22名、大学院博士前期課程リハビリテーション療法学専攻理学療法学分野の1年生9名（一般選抜6名）、2年生11名（一般選抜10名）、後期課程のリハビリテーション療法学専攻理学療法学関係は1年生4名（一般選抜1名）、2年生4名（一般選抜0名）、3年生4名（一般選抜4名）となった。

新学期には4月5日（金）午前中に入学式、午後から大学院生ガイダンス、続いて学部新入生と編入2年生に対する教務および学生生活ガイダンスを行った。ここでは作業療法学専攻と共同で、全教員との顔合わせも行った。4月10日（水）には編入3年生および在校生（各学年）ガイダンスをおこなった。この在校生ガイダンスでは、共通

科目については理学療法学専攻・作業療法学両専攻合同で、専門科目については理学療法学専攻単独で、各学年別に1時間ずつを使い、本年度のカリキュラムの説明、学生生活のルールの再確認を行った。これらにより、本専攻に所属する学部学生、大学院生のすべてに対して、カリキュラムの説明、学生生活のルールの説明・再確認がおこなわれた。説明は主任、教育・FD委員、学生生活委員、授業担当教員が担当した。

4月13日(土)には、専攻内での新入生歓迎会を行った。新2年生が幹事となり、土曜日半日を使い、在校生、新入生、教員が参加し、全員の自己紹介、懇親会(大幸厚生会館)を通じて人間的交流・連携の強化を達成した。

4月中旬から臨床実習Ⅱ、Ⅲが始まる4年生に対し、各教員が臨床実習に必要な項目についての学内実習をおこない、4月22日(月)から実際の医療機関での臨床実習が始まった。この実習は各種疾患を観察し、臨床実習指導者のもとに基本的評価および理学療法プログラムの作成を目的としている。学生は多くの不安を抱きながら、実習先に向かったが、5週ごとの反省会で、種々の問題点などが指摘されながらも、全員無事この実習を終えることが出来た。4年前から開始した臨床実習前の学内実習もあって、各学生とも実りの多い臨床実習を経験できたものと思われた。臨床実習は7月5日(金)に終了した。4年生は7月8日(月)に臨床実習反省会とともに、地域理学療法学実習のガイダンスをおこなった。地域理学療法学実習は訪問理学療法の実際を見学できる貴重な実習である。

夏季の集中実習として8月11日から14日の4日間、病態人体解剖実習が行われた。これには医学部主催の人体解剖トレーニングセミナーで解剖されたご遺体が提供された。学生にとっては人体構造と機能の理解を深めるとともに、ご遺体に対する感謝の念を通して人の命の尊厳を考え、将来の医療人としてのあり方を考えるよい機会となった。

8月27日(火)には平成26年度大学院博士後期課程、28日(水)には2年次編入学、29日(木)には大学院博士前期課程の入試を実施し、2年次編入に3名、リハビリテーション療法学専攻博士前期課程理学療法学分野に8名(一般選抜7名、社会人特別選抜1名)、博士後期課程理学療法学講座に2名(一般選抜0名、社会人特別選抜2名)が合格した。

9月25日(水)には博士後期課程の論文発表会(予備審査会)が本館第4講義室で行われ、理学療法学講座からは4名の学生が発表した。

学年を超えた学生間、学生と教員が密に交流する機会として、9月29日(日)から1泊2日の日程で岐阜県多治見市の文化施設「地球村」へ出かけて講演会、親睦会、バーベキューを楽しんだ。これには教員・学生合わせて約70名が参加し、専攻の絆を深めた。

韓国延世大学との交流会が企画され、本講座から教員2名と大学院生4名が訪韓し、11月7日から3日間にわたって学術交流と親睦を深めることができた。これら大学院生は翌週も延世大学に滞在し、韓国における理学療法の現状を学んだ。

後期授業では4年生の卒業研究の後半部分が再開され、11月27日（水）に本館第2講義室において最終発表会が開催された。22題の発表があり、教員ならびに在学生との活発な討論が交わされた。1、2年生にとっては将来の自身の研究の参考になったと思われる。また、3年生の卒業研究中間発表会は平成26年3月7日（金）に本館第2講義室で行われた。合計23題の発表があり、1、2年生からの質問も多く、活発な発表会となった。

大学院では、平成26年2月13日（木）に作業療法学専攻を含みリハビリテーション療法学専攻理学療法分野（博士前期課程）11期生の修士論文ならびに博士後期課程博士論文発表会が行われ、前期課程10題、後期課程2題、合計12題の発表があった。また、3月8日（土）には前期課程1年生（12期生）の中間報告会が行われ、理学療法分野から9題の発表があった。博士前期課程修了者は11名で、就職9名、博士後期課程進学者2名であった。博士後期課程修了者は2名で、いずれも学位を取得した。

2月23日（日）には理学療法士国家試験が施行され、本専攻学部平成25年度卒業生22名が受験し21名が合格した。3月25日（火）には保健学科第13期生の卒業式が執り行われた。本専攻は編入学生を含め22名の新卒業者を世に送り出した。そのうち14名が病院に就職し、7名が大学院へ進学し、1名は地方自治体（市役所）に就職した。

3月1日（土）には平成27年度大学院入学者のための大学院説明会が開催され、理学療法学講座説明会には、学外から12名、学内の学部3年生5名の合計17名が参加した。

3. 研究活動

各教員の研究テーマは、以下の通りである。

- 河村守雄教授 : 実験的異所性骨化と関節運動および不動化の関係、骨形成因子の特性と臨床応用、脊髄損傷モデルマウスの病態、慢性腰痛症状保有者の再発予防対策
- 鈴木重行教授 : 筋ストレッチングの効果に関する研究、培養筋細胞を用いた機械的刺激の影響、骨盤底筋群に対する理学療法効果、糖尿病モデルラットを用いた理学療法効果、作業関連性筋骨格系障害のメカニズム検証
- 山田純生教授 : 循環器疾患の運動介入・疾病管理、骨格筋パワーを用いた運動処方、運動習慣化を促進する指導方策、電気刺激療法と運動耐容能、

運動中の換気様式に関する研究

鳥橋茂子教授：マウスES細胞を用いた骨格筋、神経細胞の形成機構の研究、間葉系幹細胞の研究、消化管の発生研究

内山 靖教授：姿勢・運動の制御と運動学習に関する研究、症候障害学、理学療法教育に関する実践的研究

河上敬介准教授：機械刺激に対する培養細胞の形態応答のメカニズムの解明、伸張刺激による骨格筋の可塑性のメカニズム、筋・筋膜連結の形態と臨床的意義

石田和人講師：脳出血モデル動物における中枢神経の病理変化と運動療法の効果に関する研究、運動による脳梗塞障害予防効果に関する基礎的研究、抑うつモデルの確立および理学療法効果の検証

李 佐知子助教：脳血管障害後の痙性発症メカニズムの研究、大脳皮質損傷後の運動機能回復メカニズムの研究

野寫一平助教：ヒトを対象とした運動学習に伴う脳の可塑的変化の研究およびその臨床応用研究

鳥橋茂子教授は、平成26年3月31日をもって退職となるため、3月21日（金）に「学生と共に歩んだ研究生活」の演題で最終講義が行われた。多くの教員、大学院生、学部生、外来者が鳥橋教授の熱のこもった講義を拝聴した。また、同日夕刻に退任祝賀会が催行され、出席者一同、鳥橋教授の長年の功績をたたえ、また名古屋大学への貢献に感謝の意を表した。

4. 対外的な、または社会と関わりのある活動

臨床実習指導者連絡協議会（スーパーバイザー会議）が7月24日（水）に行われた。内容は、臨床実習全般（理学療法イントロダクション、同コミュニケーション、臨床実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）についての報告と反省、臨床実習前の学内実習である基本的臨床技能実習（OSCE）試験の実際とその学習効果、さらに臨床実習Ⅱ、Ⅲについて本学の理念や目的と実習施設における実習目的との差などについて協議した。更に、後期より始まる臨床実習Ⅰ、理学療法コミュニケーション、同イントロダクションについて協議した。

専攻代表が出席した学外関係会議は、臨床実習東海地区理学療法士養成施設調整会議（平成25年8月3日（土）、会場：国際医学技術専門学校および第16回国立大学理学療法士・作業療法士教育施設協議会（9月19日（木）-20日（金）、担当：広島大学）であった。

毎年夏に催される名古屋大学・大学説明会（オープンキャンパス）は8月9日（金）に行われた。保健学科は大幸キャンパスを主会場とし、参加した高校生に保健学科全体の説明がなされた後、各専攻に分かれ、本専攻の特徴などについて主任の河村教授が説明した。本専攻の説明会には198名が参加し、教員と学生が施設を案内し、質問に答え

た。質問も多く、高校生の興味の深さが伺われた。

10月19日（土）に保健学科が企画した「市民公開講座」を今年度は理学療法学、作業療法学の両専攻が担当した。そのうち理学療法学専攻から河村教授が「ロコモをご存知ですか？-よりすこやかに動くために-」のタイトルで講演した。200名近くの参加者が興味深く聴講した。

鳥橋教授、河上准教授が中心となり、保健学科解剖実習室を使用して、東海地区の理学作業療法学を含む18施設から延べ741名の学生が解剖標本見学の受託実習を行なった。

10月29日（火）には防災訓練が行われ、保健学科全体で、教職員、学生が多数参加し、救助袋による避難訓練、初期消火訓練として消火器の取扱説明、消化栓による放水などがおこなわれた。

その他、大幸医療センターでの相談外来は、河村教授の腰痛相談室、鈴木教授の女性尿失禁相談外来が引き続き行われた。

（主任：河村守雄）

リハビリテーション療法学専攻作業療法学講座・作業療法学専攻（平成25年度）

作業療法学講座および作業療法学専攻（以下、本講座）は、作業療法に関する学問的体系の確立と高度専門職業人の育成、および教育者、研究者の育成を目的として設置された。本専攻は、作業療法士専門職教員と医師教員から構成され、それぞれの専門を活かした教育・研究活動を通して作業療法学の発展に努めている。

1. 運営

平成25年度の本講座は、辛島教授（主任）ほか3名の教授、准教授2名、講師1名、助教2名より構成されている。本講座の運営については、全教員が参加する会議（毎週水曜日開催）によって教育および研究活動の具体的な方針を決定している。会議では、名古屋大学の学年歴および保健学科の諸行事に合わせて本講座の年間行事、事業についての計画とその計画進行状況の確認をはじめとして、予算に関する事案、学生の教育に関する事案（成績関連、単位認定、進級関連、卒後進路など）、学生生活に関する事案、臨床実習に関する事案（実習計画、臨床実習施設との連携など）、その他保健学科全体の抱える諸問題について本講座としての方針や考え方を討議決定している。特に、個々の学生への対応など具体的な問題について詳細な検討や問題解決への方策を決定している。

また、人事など教授専任事項については月1回の講座教授会議にて審議を行っている。この会議は構成メンバー全員の意見の一致を原則として運営されている。

リハビリテーション療法学専攻で密接な連携関係にある理学療法学講座と共に毎月両講座会議を設け、作業療法学講座・理学療法学講座の全教員が参加し、両講座共通の課題に取り組み、連携・協力を図っている。

大学院運営の機構としては、作業療法講座は理学療法講座とともにリハビリテーション療法学専攻の会議を月に1回開いている。

2. 教育活動

作業療法学専攻の平成25年度入学生は、21名。選抜方法による内訳は、推薦入試で入学した学生は7名、前期日程試験で入学した学生は14名。性別では男子学生8名、女子学生13名であった。また平成19年度より募集を開始した2年次編入学生は2名。性別では男子学生1名、女子学生1名であった。

平成24年度の大学院博士課程前期課程作業療法学講座には6名が入学した。内訳は、一般選抜による入学生は3名、社会人特別選抜による入学生3名。また、博士課程後期課程作業療法学講座には1名が入学した。

○ 平成25年度の大学院、学部の教育活動

1) 21年4月5日の入学式以後、5日～6日：学部新入生・編入生および大学院新入生

のガイダンスを実施している。毎年度始めには新入生および編入生のみならず在校生各学年別に年度当初ガイダンスを実施し、当該年度における教育内容、学生生活に関する説明と確認を行っている。近年では、大学生活における安全衛生に関する諸注意、大学生として守るべき個人情報に関する注意など、情報化社会に対応した諸注意が重要であり、この点にも留意したガイダンスとなるよう努めている。大学における学修と生活の基本的内容については作業療法学講座および理学療法学講座と合同で行い、個別の内容について講座別にガイダンスを行っている。この時期4年生については臨床実習が既に始まっているために、ガイダンスは前年度末までに行われている(下記)。

- 2) 平成 25 年 4 月 20 日～21 日：犬山国際ユースホステルでのガイダンス。通称犬山ガイダンスは、一泊二日の日程で行われる学部新入生・在校生合同(学部4年生を除く)の年度当初ガイダンスである。本年度も昨年と同じく愛知県犬山市犬山国際ユースホステルで開催した。新入の学部学生が円滑に快適で充実した学生生活を送るという目的で開催され、教員や2年生3年生先輩からの公私的な示唆や助言などを通して行われた。同時に学年相互の交流・親睦を目的として種々のイベントを開催した。
- 3) 平成 25 年 4 月 1 日から 8 月上旬：4 年生臨床実習実施。学部4年生を対象とし最終年次前期期間中、学内外の臨床施設(名古屋大学医学部附属病院を含め 50 施設)にて臨床実習を行った。実習期間を3期に分けて臨床実習Ⅰ(身体障害分野)、臨床実習Ⅱ(精神障害分野)、臨床実習Ⅲ(発達障害分野および老年期障害分野)の医療機関・施設で臨床実習を行なった。総計 18 週間の実習を行った。4 年生の学外臨床実習に際しては、各施設に担当教員を配置し、実習学生の学修状況や体調、実習の進捗状況を把握するように努めた。学生の実習進捗状況はメールおよび毎週の会議で報告され、問題の生じた事例については、全教員で検討し、指導教員、実習担当教授、施設担当教員、実習担当教員が対応に努めた。
- 4) 平成 25 年 6 月 19 日：博士課程後期課程大学院生研究課題中間発表会。リハビリテーション療法学専攻作業療法学講座2年生に在籍する大学院生(2名)が研究テーマについての進捗状況を報告した。研究発表会では今後の研究方針について教員からアドバイスがなされた。
- 5) 平成 25 年 8 月 9 日：オープンキャンパス開催。大幸キャンパスにおいて保健学科全体および作業療法学専攻の大学説明会を実施した。説明会参加者に対して、講義室や実習室等を案内し、本学における本専攻の教育理念、方針、具体的教育内容について説明した。
- 6) 平成 25 年 8 月 28 日：学部2年次編入生入学試験。
- 7) 平成 25 年 8 月 29 日：大学院博士課程前期課程入学試験。
- 8) 平成 25 年 8 月 27 日：大学院博士課程後期課程入学試験。
- 9) 平成 24 年 9 月 13 日：卒業研究中間発表会(学部4年生)。卒業研究の途中経過の報告と教員による指導の機会として行われた。

- 1 0) 平成 24 年 9 月 17 日～27 日：作業療法入門実習（学部 1 年生）。本専攻に入学してから最初の臨床実習である。作業療法における主要な分野（身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野、老年期障害分野）の関連の機関・施設 6 ヶ所の見学実習を行った。
- 1 1) 平成 24 年 9 月 17～12 月 11 日：作業療法基礎学実習（学部 2 年生）。作業療法の対象となる施設や対象者を理解する目的で 2 年後期に実施している。学生は、身体障害分野、精神障害分野、発達障害分野及び老年期分野の 4 領域の医療機関・施設のうち 3 か所で実習をした。1 か所の実習は 3 日間とした。
- 1 2) 平成 25 年 11 月 7 日～9 日：第 4 回名古屋-延世大学大学間学術研究交流会が延世大学で開催され、作業療法学専攻大学院生 3 名と教員 2 名が参加して研究発表が行われた。大学院生 3 名は、1 週間の滞在で延世大学の見学、院生との交流、韓国 OT 学会、研究室訪問などを行うなかで、研究活動、教育活動について学び帰ってきた(短期留学)。
- 1 3) 平成 25 年 12 月 7 日：卒業研究発表会（学部 4 年生）。卒業研究の最終発表会であり、続いて論文の作成が行われた。研究発表会の内容は、卒業研究論文集として発刊した。
- 1 4) 平成 26 年 2 月 10 日：学部の推薦入学試験。
- 1 5) 平成 26 年 2 月 13 日：大学院博士課程前期課程および後期課程学位論文発表会。本専攻からは博士課程前期課程 6 名、後期課程 1 名が発表を行なった。
- 1 6) 平成 26 年 2 月 20 日：臨床実習指導者会議。4 年次に行われる臨床実習での実習協力施設の実習指導者を招いて、臨床実習指導者会議を開催した。議題は主として平成 24 年度臨床実習報告、平成 25 年度実習計画であり、学外の実習指導者と本専攻教員の意見交換等を行なった。また、臨床指導者 2 名から評価実習についての実習方法や評定についてのプレゼンを依頼し、実施した。
- 1 7) 平成 26 年 2 月 25-26 日：一般選抜前期日程入学試験。
- 1 8) 平成 26 年 3 月 1 日：理学療法士作業療法士国家試験実施。本専攻から卒業予定者 23 名が合格した(100%)。
- 1 9) 平成 26 年 3 月 1 日：大学院説明会開催。一般学生 11 名、社会人 3 名(計 14 名)が参加した。
- 2 0) 平成 26 年 3 月 8 日：博士課程前期課程中間発表会。前期課程 1 年在籍の 7 名が現在の研究状況を報告した。
- 2 1) 平成 26 年 3 月 25 日：学部および大学院卒業式。本年度は学部学生 24 名（男性 2 名、女性 22 名）が卒業した。大学院リハビリテーション療法学専攻作業療法学講座では修士号 7 名(男性 4 名、女性 3 名)博士号 1 名(男性)の取得があった。

○リーディング大学院「ウェルビーイング」

名古屋大学の「ウェルビーイング in アジア」実現のための女性リーダ育成プログラムが採択された後、伊藤恵美講師を中心に準備に取り掛かった。研究アシスタントの大学院生も3名選考されて、26年度秋から開講するプログラムの試行に取り組んだ。

3. 研究活動

本講座では作業療法各分野および基礎的研究各分野における研究が大学院教育とともに行われている。研究は教員による個人研究が中心であるが、企業や他施設との共同研究も行われている。

(1) 共同研究

- 1) 厚生労働省難治性疾患克服事業（スモン患者のQOLに関する研究：寶珠山・清水・上村・星野）
- 2) 厚生労働省老人保健健康増進等事業（寶珠山）
- 3) 大学共同利用施設磁気計測装置（生理学研究所）における共同研究（非侵襲的脳機能計測法を用いた多種モダリティー刺激による誘発脳反応と皮質間連絡線維伝導の計測）（寶珠山）
- 4) 日本語入力BCIシステムの臨床応用の研究（工学研究科）（寶珠山）
- 5) 青年期の精神病理学的研究（学生相談総合センターと共同研究）（鈴木）
- 6) ASD児の情動的コミュニケーションを基盤にした作業療法の効果についての研究（京都：花ノ木医療福祉センター・辛島）
- 7) 中高年者の高次脳機能に関する長期縦断的資料を基盤とする神経心理学的研究（関西福祉科学大学、医学系研究科・整形外科）（伊藤）
- 8) 統合失調症に対する認知リハビリテーションの開発とその効果検証に関する研究（医学系研究科精神医学）（星野）

(2) 個人研究

- 1) 精神障害の時代変遷に関する研究（鈴木）
- 2) 精神障害と社会との連関に関する研究（鈴木）
- 3) 発達障害の青年期に関する研究（鈴木）
- 4) 自閉症スペクトラム児の情動的コミュニケーションを基盤とした作業療法の効果（辛島）
- 5) 特別支援教育と作業療法（辛島）
- 6) 特別支援教育における机上課題の遂行を促すための座位と課題内容（辛島）
- 7) 重度知的障害者の生活の質と作業療法（辛島）

- 8) 運動と体性感覚誘発脳反応に関する研究 (寶珠山)
- 9) 意識と感覚情報処理能力に関する研究 (寶珠山)
- 1 0) 運動イメージの評価法開発に関する研究 (澤田)
- 1 1) ボツリヌス菌毒素投与後の作業療法介入有効性に関する研究 (澤田)
- 1 2) 課題および環境の変化に対応する上肢到達運動の多様性に関する研究 (澤田)
- 1 3) 上肢の左右両側運動の運動特性に関する研究 (澤田)
- 1 4) 移乗動作における認知機能と運動機能の同時処理に関する研究 (清水)
- 1 5) 自己関連情報に関する心理的処理特性に関する研究 (清水)
- 1 6) 中手指節関節の可動域制限が日常生活活動に及ぼす影響に関する研究 (清水)
- 1 7) 高次脳機能障害作業療法の効果に関する研究 (酒井)
- 1 8) 作業療法課題難易度と脳賦活に関する研究 (酒井)
- 1 9) 視知覚認知機能評価の開発に関する研究 (酒井)
- 2 0) 日常活動と QOL との関連に関する研究 (伊藤)
- 2 1) 前頭葉機能検査に関する研究 (伊藤)
- 2 2) 日常活動と運動機能及び認知機能との関連に関する研究 (伊藤)
- 2 3) 高次脳機能障害者の自動車運転に関する研究 (伊藤)
- 2 4) 精神障害者の就労支援に関する研究 (星野)
- 2 5) 精神障害領域における作業療法士の専門性と役割に関する研究 (星野)
- 2 6) うつ病女性の家庭復帰における作業療法介入に関する研究 (星野)
- 2 7) 人の脳における言語情報処理能力に関する研究 (上村)
- 2 8) 運動イメージ時の脳反応の研究 (上村)

4. 対外的な、または社会と関わりのある活動

- 1) 平成 25 年 10 月～12 月 第 1～7 回愛知県作業療法士会現職者共通研修 (上村)
- 2) 平成 22 年 4 月～平成 25 年 3 月 名古屋市介護保険認定審査会 (伊藤・清水・上村)
- 3) 平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月 名古屋市教育委員会特別支援教育指導室スーパーバイザー (辛島)
- 4) 平成 24 年 4 月～平成 27 年 3 月 国立大学 PT, OT 教育施設協議会理事 (辛島)
- 5) 平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月 文部科学省リハビリテーション専門委員 (辛島)
(主任: 辛島千恵子)

平成25年度名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）市民公開講座

テーマ：「健やかなシニアを目指して、からだときもちの準備を！」

本市民講座は、名古屋大学での研究成果や知的財産を地域に還元することを目的とし、一般市民のみなさまを対象に健康や医療に深く関わるテーマを設けて昭和58年以来（当時は医療短期大学部）、毎年開催しています。また、ひとりでも多くの方々に参加していただけるよう平成18年度から受講料を無料としております。平成25年度には名古屋大学医学部保健学科から名古屋大学大学院医学系研究科（保健学）への組織変更があり、教員の教育や研究は大学院レベルでの活動を中心に行うことになりました。本年度は組織変更後、最初に開講された市民公開講座であり、「健やかなシニアを目指して、からだときもちの準備を！」というテーマのもとに2つの話題で本学リハビリテーション療法学専攻の教員による講演を行いました。

平成25年度市民公開講座の実施要項は、以下のとおりです。

◎開講日時 平成25年10月19日（土）10:00～12:10

◎開講場所 名古屋大学大学院医学系研究科(大幸地区) 東館大講義室（東館4階）

◎受講料 無料

◎定員 100名 事前の申し込みが必要です。

※ 当日直接ご来場された場合でも席に余裕があれば受講いただくことができます。

「健やかなシニアを目指して、からだときもちの準備を！」

第1講 10:00～11:00 「ロコモをご存知ですか？ -よりすこやかに動くために-」

（講師：河村守雄 先生・名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学専攻）

【内容】超高齢社会の中で、手足の痛みや寝たきりの不安から解放されて、老後をすこやかに生き抜くことは誰もが望むところです。加齢に伴って、骨や関節などの運動機能を低下させ、日常生活に障害をもたらす「運動器症候群（通称ロコモ）」の治療・予防が注目されています。今回はロコモの一因となる腰や膝の痛みについて考えてみたいと思います。

第2講 11:10～12:10 「老後のために、少し手を使ってみましょう」

（講師：澤田雄二先生・名古屋大学大学院医学系研究科リハビリテーション療法学専攻）

【内容】加齢に伴い認知機能や感覚運動機能の低下が起こり始めます。大事なことは機能低下速度を緩やかにすることです。日常生活上動作から創作活動まで上肢の運動は感覚運動機能を意識的に使うことが求められる動作で、心と体に様々な効果を及ぼすと考えられています。ここでは上肢の運動の効果について考えてみたいと思います。

本年度の講座には、197名の事前申し込みがあり、当日の出席者数は140名であった。出席者の内、112名からアンケート回収にご協力が得られましたので、その結果を以下に示します。

A. アンケート集計結果

①性別、②年齢構成

	男	女	計	%
10代	0	2	2	2
20代	0	0	0	0
30代	0	1	1	1
40代	0	1	1	1
50代	2	6	8	7
60代	5	12	17	15
70代	17	42	59	53
80代	11	12	23	21
未記入	0	1	1	1
計	35	77	112	100

③職業

	男	女	計	%
学生	0	2	2	2
会社員	2	5	7	6
自営業	4	0	4	4
主婦	0	40	40	36
その他	6	8	14	13
無職	23	20	43	38
未記入	0	2	2	2
計	35	77	112	100

④本学の卒業生か

	男	女	計	%
はい	2	3	5	4
いいえ	31	70	101	90
未記入	2	4	6	5
計	35	77	112	100

⑤本講座を何で知りましたか(複数回答あり)

	男	女	計	%
新聞、TV	5	5	10	8
区役所	0	0	0	0
生涯学習センター	5	3	8	6
図書館	3	1	4	3
友人情報	2	18	20	16
本学科からの案内	24	52	76	61
ホームページから	4	0	4	3
その他・未記入	1	1	2	2
計	44	80	124	100

⑥感想を聞かせてください

	男	女	計	%
役に立った	24	61	85	76
まあ役に立った	7	14	21	19
あまり参考にならなかった	2	0	2	2
その他	1	0	1	1
未記入	1	2	3	3
計	35	77	112	100

⑦実施方法について

A全体の時間について

	計	%
長い	3	3
丁度よい	97	87
短い	3	3
未記入	9	8
計	112	100

Bテーマ毎の時間について

	計	%
長い	1	1
丁度よい	92	82
短い	6	5
未記入	13	12
計	112	100

C講演形式について

	計	%
講演型式	56	50
参加型セミナー	20	18
講演型式+参加型セミナー	6	21
その他	1	1
未記入	29	26
計	112	100

B. 希望テーマ、感想

- ・スポーツ障害
- ・糖尿病についての運動と食事療法
- ・シニア向けの疾病予防やPKK等を多面的な面からevidenceや知見に基づくお話に期待しています。
- ・名古屋駅あるいは栄に近い会場で実施いただけたらありがたいと思います。
- ・呼吸系の講座を希望します。

- ・糖尿病予防について
- ・心臓病講座（狭心症経験者）
- ・いつも、その時々合った講演内容で満足しております。この度は特にかかえている症状でした。ありがとうございました。
- ・口腔系が希望。
- ・変形肢関節症
- ・健康寿命を保って寿命まで生きたい。（ＱＯＬを保って）そのための情報をいろんな方面のお話を聞きたい。
- ・認知症について
- ・一番大切などしたら認知症にならないか。
- ・ボケ予防策
- ・感染症予防
- ・超高齢社会における個人のＱＯＬの向上の為の方法論。
- ・河村先生の話は、大変良くわかりました。
- ・末期がんケアと保健学の出来ること。
- ・栄養学。高齢者の食事について具体的に一人暮らしの食事法・食器の管理法・調理器具とか。
- ・身体の組織や栄養の取り方等、種々受講していますが、いつ聴講しても勉強になると思っています。繰り返し勉強する事が第一だと感じます。ロコモ体操は毎日１０分間程やっております。
- ・リハビリで上手に刺激を与えると機能が回復する療法について（発症から６ヶ月過ぎても）
- ・最新のリハビリ医療について。（入院中から回復期のもの・在宅へ戻ってからのもの）
- ・睡眠について。深夜・早朝覚醒など。睡眠の量（何時間寝れば良いのか）
- ・個人的な事かも知れませんが、夫がパーキンソン病（６０才で判明）です。今後、どのように向き合っていけたら良い
- ・大変分かり易い講座で、資料も良かったです。腕・肩・首のリハビリも専門講義をお聞きしたい。
- ・実技（聴くばかりではなく）・希望は実際に行く。
- ・いろんな悩みをかかえて来場しているのだから５人位の質疑応答を組み込んでほしい。
- ・高齢者向きのテーマで企画してほしい。ＥＸ．『腰の手術で、すっきり霧が晴れた様になるのか？』『慢性腰痛の最先端医療』など。
- ・一通りの話しは最近のテレビ番組でやっているのので、足を運んで今日聴きに来て“良かった”と思える中味の話しを聴きたいと思い
- ・高齢者人口増の健康度をかさ上げする全てと言うか総合的な国をあげてのアクション。
- ・時に男性に対してのプログラムを。
- ・自分の主人を見て考えさせられる。余りにも身勝手に思いこみが強い男性老人の意識改革が必要。妻だけでは立ち行かない。
- ・私の周りの皆妻達は、とても困っている。妻におんぶにだっこがなげかわしい。
- ・携帯電話、講演中はＯＦＦにするかマナーモードにするか開始前に徹底していただきたい。
- ・老けにくい生き方（精神面）などの公開講座。老化を少しでも遅くする。（特に何に気を使うのか）
- ・今回のように、その時の話題のテーマ・笑いの効用と実践・尿失禁。

まとめ

本年度の市民公開講座はリハビリテーション療法学専攻が担当しました。理学療法学分野および作業療法学分野より、各1名の講師を選出し、健康な老後を迎えるために予防的な観点から今何ができるかという視点で講演して頂きました。両講演者は、教育機関や臨床現場での豊富な経験を持ち、それぞれの専門分野で、最近の内容をわかりやすくお話していただき、出席者のみなさまからも高い評価をいただきました。特に、河村守雄教授には、整形外科医のご専門の立場から、現在話題になっているロコモティブ症候群（運動器症候群）について、詳細な内容の解説から具体的な予防方策に至る有益なご講演を分かりやすくお話し頂きました。また、澤田雄二教授には、作業療法士のお立場から、特に「手を使う」ということが、日常生活動作から創作活動に至るあらゆる場面を通じて、身体と脳を活性化して、健やかな老後へとつながるポイントとなることを強調されました。今回の企画は、リハビリテーション療法学を専門とする本専攻の教員が、これまでの研究・教育・臨床の場で積み上げられてきた知識と経験を市民の皆様提供する良い機会となり、社会活動として大きな貢献になり得たと思われまます。

(平成25年度 地域貢献委員会委員長：石田和人)